

平成 23 年 度



# 人権啓発シリーズ集

財団法人 高知県人権啓発センター

## はじめに

この冊子は、平成二十三年六月から十二月まで高知新聞に掲載しました  
人権啓発シリーズ七回分を編集したものです。

さまざまな人権問題の解決を図るための啓発資料として、ぜひ、多くの  
みなさまに活用していただきたいと願っております。

平成二十四年三月

財団法人 高知県人権啓発センター

理事長 中澤彰穂

# 目次

一、日本人の差別観	猿まわし師	村崎 太郎	1
二、愛という名の侵害	人材開発コンサルタント (株)ワイズコミュニケーション代表取締役 NPO法人ハートフルコミュニケーション代表理事	菅 原 裕 子	6
三、ADHDをチャンスに	漫画家 愛媛県新居浜市こども発達支援センター相談員	あ い さ	10
四、自分のことが好きですか	長野県上田情報ビジネス専門学校副校長 「ココロの授業」講師	比田井 和 孝	14
五、貧困の中を生きる	弁護士（法テラス高知法律事務所）	中 島 香 織	18
六、ぼくの場合	漫画家、絵本作家、詩人、作詞家	やなせ たかし	22
七、教科書無償50年	元「長浜地区小中学校教科書をタダにする会」事務局	村 越 良 子	26

同和問題

# 日本人の差別観

(平成23年6月24日掲載)

村崎 太郎

むらさき・たろう氏

猿まわし師。1961年山口県光市生まれ。17歳でニホンザルの初代次郎とコンビを結成し、日本に途絶えた猿まわしを復活。次郎の「反省」ポーズで人気者になる。「文化庁芸術祭賞」を受賞。アメリカ連邦議会から「日本伝統芸」の称号を授与。2007年テレビプロデューサー栗原美和子と結婚。被差別部落出身であることを公表。著書は「ボロを着た王子様」、夫妻共著「橘はかかる」(全国学校図書館協議会の選定図書)などがある。

私は3年前に、被差別部落出身者であることを、自ら明らかにした。

それまでは隠し通して生きてきた。父親が部落解放運動家であり、多くの著書も残している理由から、私が昔から出自を公表していると誤解している人がいるようだが、本人にはそんな自覚はなかった。父と私とをつなげて考えるのは、部落差別問題を勉強しているほんのわずかな人であり、全国の9割以上の人が、愉快な猿まわし芸人「太郎次郎」としか認識していなかった。

だから有名になればなるほど、被差別部落出身者であることを知られるのが怖くてたまらなかった。その事実がばれたら、人気も仕事も仲間も全て失ってしまうだろう…家族や身内を不幸に巻き込んでしまうだろう…とお

びえていた。一方で、そのように卑屈に生きている自分を情けなく感じた。いや、腹立たしく思った。

以来、およそ30年近く、自分の中の矛盾と葛藤し続け、47歳の時、ついに前者の自分に別れを告げた。おびえて卑屈に生きる自分を捨てることにした。顔と名前の知られた芸能者としては初めて、部落民であることを公にしたのだ。

勇気を振り絞ったカミングアウトの結果は、覚悟をはるかに上まわる悲惨なものだった。

「敬遠」や「無視」といった冷たい反応だけに留まらず、「やつは、差別問題を材料に商売しようとか企んでいる」と誹謗中傷する人間まで現れた。そんな岡太さがあるならば、30年間も悩んで、うつ病を患ったり自殺を考え

たりするはずがないのに。いずれにせよ、「村崎さん、もつと詳しく話を聞かせて下さい」と多くの人に言われたり、「実は私も同様の差別を受けてきて」と著名人の方々が後に続いてくれたり、などという解放的な展開は全く訪れなかったということだ。

その現象を見て、「いまだに引きずってるのは、被害妄想の強い当事者だけだ」と平然と口にする人たちもいる。彼らに向かって私は堂々と告げる。それは、あなたたちの勝手な思い込みですよ、と。この問題を公に語り合うことができない―それこそが未解決の証しなのだ。

確かに、居住地域の環境状況や就学就職問題は、かなり改善された。しかし、それらは表向きの進歩にすぎない。日本人の心が進歩

したとは、どんなにひいき目に見ても言えない。日本人の差別観は底辺で停滞したままである。

部落差別に起因する結婚障害は、まだまだ続いている。恋人の親から拒絶されて自殺を図る若者や、娘の結婚が破談になったことに責任を感じて命を絶つ親が、現存しているのだ。しかし、その事実が明るみに出ることとはほとんどない。遺族らが、好奇の目にさらされることを忌避するから、自殺の原因である差別を追及しないのだ。強姦ごうかんされた女性が裁判で証言することを拒絶することと、似ているかもしれない。

傷を負った弱者が、それ以上傷つくことを恐れてしまう。弱者がおびえて生きていかなければならない。そういった現状を、周囲は

平気で放置する。見て見ぬふりをする。だから弱者の声は聞こえてこずに埋もれてしまう。

このたび起きた福島原発事故に関しても、私は憤りを抱く。国民は、「危険はありませんよ」という暗示にかけられていたのだ。これは、「部落差別なんて過去の話ですよ」とごまかされていることと類似する。だます側だけではなく、だまされる側の事なかれ主義が、福島県民の大悲劇を生んだのだ。

私は、そんな日本人が一人でも減ってくれすることを願って、3年前に行動を起こした。直後は、現実の厳しさに打ちひしがれたけれど、数カ月後には「ローマは一日にして成らず」と、半歩の覚悟を決めた。諦めなければ、いつかきっと日本人の意識は変わる―そう信じて、相方の次郎と共に旅を始めた。いろん

な傷を負った人たちと触れ合う旅だ。

私は、彼らに対しても訴えかける。例えば元ハンセン病の患者さんたちが暮らしている施設を訪ね、彼らにお願いをする。「どうか、あなたたちが受けた苦しみを葬り去らないで、世間に伝えて下さい。傷口をさらけ出すことはとても辛いけれど、今度同じような苦しみを味わう人を生まないために、あなたたちが語って下さい。それは、あなたたちの義務でもあります」と。

差別する人間たちだけを責めてはいけない。われわれ差別される側の人間も、勇気を持たなければいけない。そして、日本人の大半を占める差別されてもいないし差別してもいない、ただ他人事として客観視している人間たち―。彼らにこそ、目を開き耳を傾けてもら

いたい。部落問題に限らない。日本国内とも限らない。世界中に、人として心を向けなければならぬ問題はあるのだ。



子どもの自立

# 愛という名の侵害

(平成23年7月25日掲載)

菅原裕子

すがはら・ゆうこ氏

(有)ワイズコミュニケーション代表取締役。NPO法人ハートフルコミュニケーション代表理事。1977年より人材開発コンサルタントとして、企業の人材育成の仕事に携わる。95年、企業の人育てと自分自身の子育てを基に、親たちのためのプログラム「ハートフルコミュニケーション」を開発。各地の学校やPTA、地方自治体で講演やワークショップを行い、好評を得る。2006年、NPO法人ハートフルコミュニケーション設立。現在に至るまで、多くの講演や講座、人材育成を行っている。

人権と聞くと、私たちは、当然尊重すべきものだと感じる。そして、自分は人の人権を侵すことのないよう、日々気をつけて生きていると自負している。「私は、よく人権を侵害しています」などと言う人はいない。ところがどうだろう。虐待される子どもの数は年々増えている。ニュースなどで報道されることもあるが、それは氷山の一角だとも言われている。

普通の幸せな家庭には、子どもの人権侵害などは無縁だと思いがちだが、実はそんな日常にも、人権侵害は存在している。「しつけ」という名の人権侵害だ。

確かに、子どもが自立できるよう教育するのは、親の役目である。しかし、人を教育するという名目の下、暴力が正当化されること

はない。言うことを聞かないからといって上司が部下に暴力を振るえば、当然のように事件になる。ではなぜ、子どもに対する暴力はしつけで正当化されるのだろうか。ここでは、愛するが故の暴力、一見、親さえも愛情と誤解する暴力について考えてみたい。

生まれ落ちたばかりの子どもはとても弱く、大人の世話がなければ生きていられない。このとき、子どもが「できない」から、親が「代わりにやる」のは、大切なことである。やがてハイハイを始めた子どもは何でも口に入れる。何でも区別なく口に運ぶこの時期、子どもが「分らない」から、親が「管理する」というのは、やはり大切なことである。

しかし、これがいつまでも続くと、危険な状態の素地となりかねない。子どもは本来、

生きていくために必要な多くのことを自分ではできない状態から始まって、日々「できる」を増やし、最後には、生きていくために必要なことは何でも自分でできるようになる。そのプロセスに携わる中で、「まだできないだろう」「まだ分らないだろう」と考えて子どもの領域に踏み込むことこそが、人権侵害の第一歩となってしまう。

たとえば、小学生や中学生が朝起きたり、持ち物を用意したり、宿題をすることは、子どもの領域にある。遅刻して先生に怒られたり、忘れ物をして困ったり、宿題をしないで気まずい思いをするという結果は、子ども自身が受け止め、行動を変えることで回避できるものだからである。子どもの成長は、自身自身の行動の結果を経験することで起こる。

親の領域は、子どもを朝起こすことではなく、子どもが自分で朝の時間を管理できるように援助することにある。陰ながらの援助、これは親が子どもの領域に侵入し子どもの仕事を代わりにやることではない。

子どもが自分でできるようになるように、一緒に考え、失敗を見守り、力づけ、うまくやるようになったことを喜ぶことである。

これではまるで、親切でお世話のいい親は子どもの人権を侵害していると言っているようにだと憤慨される方もいるだろう。

親の愛情と言えば聞こえはいい。だが、一人の人間をいつまでも子ども扱いし、行き届いたお世話をするというのは、長い目で見たとき、この子の自分で生きていく力が育つのを妨げているのではないだろうか。これを人

権侵害というのは言い過ぎだろうか。

このお世話過多の傾向は、社会的にも起こっている。私の友人が、息子が入学した大学から保護者会の案内を受け取った。大学で保護者会とはと、違和感があつたが一応行ってみることにした。個人面談の場までが用意されていて、友人は非常に驚いたという。

少子化の中、子どもはますます大切にされる。ところが私たちは、大切にするという言葉の意味をはき違えていないだろうか。本当に大切にするのであれば、子どもがしっかりと自立するよう、親の役割、教育の役割をはっきりと自覚する必要がある。

親の役割とは、子どもの領域を侵害することではなく、子どもの成長に合わせて適切なサポートを行うことである。放任ではない。

いつも注意深く見守り、気にかけているということを伝え、その上で子どもの仕事を尊重し、余計な手出しをしない。

簡単なことではないが、子どもの持つ力を信じて見守れば、思った以上の成長ぶりに驚かされることも多い。

そしてもう一つ、親の大切な役割として、子どものモデルになるということが挙げられる。子どもは、親が望んだように育つわけではない。親をモデルとし、親がして見せたように育つ。自立した幸せな人間に育ってほしいと願うなら、何よりもまず親自身が自立し、幸せになることだ。子どもは自然とその生き方を見習い、自分の人生の舵を取っていくことができる。

障害者と人権

(平成23年8月22日掲載)

# ADHDをチャンスに

あーさ

あーさ氏

1980年生まれ。漫画家。愛媛県新居浜市子ども発達支援センター相談員。21歳の時、自分がADHDであることを知る。当事者の経験を生かして、2003年に「漫画で解説『フロンティア★ADHD』」のホームページを立ち上げる。順調にアクセス数を伸ばし、好評を博す。著書は「めざせ！ポジティブADHD」。NPO法人「えじそんくらぶ」の会報誌にて「エンジョイ★ADHD」連載中。

「何か自分は他の子たちと違う気がする」。

高校生のころ、よくそう思っていた。「どこが違う?」と聞かれると困るのだが、漠然と「何かが違う」と感じるのである。

例えば、友だちと自主勉強をしている時。

皆はさらさらと鉛筆を進めているのに、私はどうにもやる気が出せず、ボーツとしてしまう。大好きな漫画を描いている時は、一日中だって集中できるのに。

「これじゃいけない」と意識を勉強に集中させようとするのだが、そんな気持ちとは裏腹に、私の脳が「そんなことより、楽しいことを考えよう」と、勝手に軌道修正してしまい、気が付くと勉強ノートはイラストだらけになっているのである。

つまり、集中したい対象を、自分の意思で

選べないのだ。他の子たちは、「しなきゃいけないこと」に対して、あんなにも簡単に集中できるのに、なぜ自分はできないのか。そこに一抹の不便さを感じていた。

そしてこのころ、私は母から「人の気持ちを考えなさい」とよく叱られていた。決して人を軽んじていた訳ではない。私なりに気を使っていたつもりだった。

でも、私には気付けない部分で「あんなことを言うものじゃない」と、よく叱られた。相手が嫌がるスイッチがよく分からない。人付き合いに自信がなく、少しこわごわとしていたものだった。

このころの私は、そういった問題を「自分の努力不足」と解釈していた。だから、もっと頑張れば、いつか皆と同じようにできる

はずと思っていた。そんな私に転機が訪れた。21歳の時、自分がADHDであると分かったのである。

ADHD（注意欠陥多動性障害）：同じ年齢・同じ知能の、他の人たちと比較して、「注意力散漫・多動・衝動的」という三つの特性を強く持つ発達障害である。原因は、理性のコントロールをつかさどる前頭葉の機能不全と言われている。

よく人から、「ADHDと診断されてショックだったか？」と聞かれるが、とんでもない。むしろ私は天に感謝した。今まで漠然と「何か違うなー」と思っていたことが、具体的なものとなって目の前に現れたのである。

「やっとなら自分の自分に出会えた。これを機に私は変わるかもしれない！」という希望

が湧いてきたのだった。早速、関連書をたくさん読み、ADHDについて勉強をした。そうするうちに、いろいろな事が分かってきた。

まず、集中したい対象を選べないこと。それはこちらの必要に応じて、前頭葉を活性化できないことが原因だと分かった。裏を返せば、集中したい状況になった時に、意識的に前頭葉を活性化させることができれば良いのだ。

前頭葉は「好きなことをしている時」「単純に体を動かしている時」に、より活発に働く。故に、やらなくてはいけないのに、どうしてもやる気が出せない時は、初めに15分ほど好きなことをする。まずは前頭葉が活発に働くようにするのだ。するとその後の仕事や

勉強に、自分でも驚くほど集中できるのである。

そして、無意識に人を傷つけてしまう問題。これも前頭葉の機能不全に原因があった。前頭葉には、「物事を客観視する」という機能（メタ認知）が備わっている。だが、生まれつき前頭葉に機能不全があるADHDの人は、この部分が育ちにくいのだそうだ。

だが、ありがたいことに、脳は使えば使うほど成長する。つまりADHDの人でも、日々「自分はこうされるとうれしいけれど、相手はどうだろう？」というふうに、いつもいつも相手の気持ちを意識していると、自然にメタ認知は鍛えられていくのだ。

こうして、勉強と工夫を重ねていくうちに、私はどんどん変わることができた。仕事

の効率が良くなった。周りの評価もガラリと変わった。それまで見えなかった人の個性が見えるようになってきた。何よりどんどん世界が広く、奥深く感じられるようになったのである。

私は得意の漫画を使って、自分の経験を本にした。そして、それがきっかけで、今では講演会・学校の巡回相談の依頼も頂けるようになった。昔は自分の事しか考えられなかった私が、今は微力ながらも「人のお役に立つ」仕事をさせて頂ける。それは本当に幸せな生き方だと思う。



# 自分のことが好きですか

比田井 和 孝

ひだい・かずたか氏

1969年長野県生まれ。上田情報ビジネス専門学校副校長。日夜学生の幸せを考え、バリバリ実行していく熱血漢で、学生たちに、物事に対する姿勢や「人として大切なこと」「何のために働くのか」をアツく語る。この「ココロの授業」が評判になり、全国各地から講演依頼が殺到。講演実績は7万人を超え、「号泣しました」「この授業で私は変わりました」など、感動の声が続々と寄せられている。著書は「私が一番受けたココロの授業」(こま書房新社)。FM長野「ヒダカズのココロの授業」パーソナリティー。

「僕は、とても暗い生徒でした。『自分さえ良ければ他人なんてどうだっていい』と思っていたし、周りの人が何を言おうが、何をしようが、全く関心がなかったんです。授業中はいつも寝ていて、遅刻や早退、サボりも当たり前でした。……高校時代を振り返ってそう語るN君は、家族と仲が悪く、「家族と離れて暮らしたい」という理由で、あえて自宅から通学できない場所にある、私の専門学校を選んで入学してきた学生でした。

入学後も、高校時代と同じように過ごしていたN君は、ある日職員室に呼び出され、先生から1時間もの間、ひどく叱られます。「こんなに本気で怒られたのは生まれて初めてだ……。今まで、俺、まずかったな……」と思ったN君。彼は次の日から変わりました。休まず

授業に出て、真剣に取り組むようになったのです。するとどんどん勉強が面白くなってきました。

ある日の休み時間、クラスメートが「この問題、教えて」と質問にきました。N君が教えてあげたところ、クラスメートは一言「ありがとう」。……どこの教室でも普通に見られる光景ですが、実はN君にとっては、衝撃的な出来事でした。

「それまで、人から頼りにされてお礼を言われたことなんて、一度もありませんでしたから」。……N君は、この時のことを、いまだに鮮明に覚えているそうです。

この日からN君の勉強の目的が変わりました。「クラスのみんなから、いつ、どんな質問をされてもちゃんと答えられるようにした

い。つまり、「自分のため」ではなく「人のため」に勉強をするようになったのです。

その強い思いは、N君を突き動かしました。さらに熱心に勉強を重ね、毎晩8時まで学校に残って、友人に勉強を教えるようになったのです。

毎日のことですから、はたから見れば、とても大変そうに思えました。でもN君はこの時のことを「全然、大変じゃありませんでした。むしろ、頼りにされるのがうれしくてたまりませんでした」と言っています。そんなN君は、いつしかみんなから信頼される存在になっていったのです。

N君が2年生になった年の誕生日。その夜、N君のアパートには、約束もしていないのに、続々と友人が集まって来て、誕生パーティー

を開いてくれました。さらに、翌日学校に行くと、「昨日、行けなくてゴメンネ。遅れたけどおめでとう」と、何人もの友人がプレゼントを持ってきてくれたのです。

N君はその日、両手に抱えきれないほどのプレゼントを持ってアパートに帰り、一人、涙を流しました。N君の見返りを期待しない「与える心」は、何倍もの感動になって彼に返ってきたのです。

学校を卒業したN君は、今、「人の役に立つシステムを作りたい」と、システムエンジニアとして活躍しています。「高校時代の友人に会うと、『お前、本当に人間変わったな』と驚かれるんですよ」と話すN君の目はうれしそうに輝いていました。

さらにN君は、「今、家族がとても大事に

思えるんです」と語りました。仕事の都合で一人暮らしをしているN君は、忙しい合間を縫っては実家に帰り、両親に食事をごちそうしたり、プレゼントをしたりしているとか。2年前、家族のことが嫌で仕方なかったN君が、なぜ、こんなにも変わったのでしょうか？

N君は高校時代、「他人なんてどうだっていい」と考える自分のことが大嫌いで、自分を受け入れることができませんでした。そんなN君が、自分のルーツである親や兄弟を受け入れられなかったのは当然です。

しかし今は、「人のために働きたい、人の役に立ちたい」と思っている自分が好きなのです。ここまで変わった自分を誇りに思い、自分を受け入れているのです。必然的に、自分のルーツである家族も大切に思えるんです

ね。「親のおかげで自分がこの世に存在しているんだ」と、心から感謝しているのです。

人は「自分さえよければいい」と思うような自分のことは、実は好きにはなれないのです。「人の役に立ちたい、人を喜ばせたい」と思う自分が好きなのです。それが、人としての本当の生き方なのでしょう。

今、いじめや他人への無関心、自己中心的な言動等、さまざまな問題が起こっています。もしかしたら「自己肯定感」の少ない人たちが増えてきているのではないのでしょうか。「他人を尊重する心」は、「自分を大事にすること、自分を好きになること」から始まります。N君の生き方は、私にそんなことを教えてくれました。

子どもの人権

(平成23年10月22日掲載)

# 貧困の中を生きる

中 島 香 織

なかじま・かおり氏

1976年高知市生まれ。東京外国語大学卒。2007年弁護士登録。08年から現在まで法テラス高知法律事務所勤務。09年から日本弁護士連合会貧困問題対策本部「女性と子どもの貧困部会」に所属し、子どもや女性の貧困問題に取り組む。12年12月に行われる日本子ども虐待防止学会第18回学術集会高知りようま大会事務局長を担当。

就学援助制度を利用する児童生徒数が2010年度に155万人を超え、過去最多となりました（文部科学省の調査）。高知県の全児童生徒数に占める利用生徒数の割合は23%で、全国4位。4人に1人の子どもが、就学援助を利用せざるを得ない経済的困窮の中にいます。

厚生労働省が発表した貧困率（相対的貧困率）によると、日本の子ども全体では7人に1人が、大人が1人の世帯に限ると、2人に1人の子どもが貧困の中にいます。

ここで言う貧困とは何でしょうか。経済大国と呼ばれた日本の、私たちと同じ時代に、同じ地域で、子どもたちに何が起きているのでしょうか。

インフルエンザになっても病院に行けない、

給食がない夏休みに体重が減る、お金をめぐる両親のけんかや暴力を日々目にしなければならない。

貧困が子どもたちから奪うものは、多々あり、かつ深刻です。医療も、教育も、安心安全も、友達付き合いも、意欲も、目に見えない貧困に奪われてしまいます。

安心できる家庭で、十分な睡眠を取り、朝ごはんを食べて学校に来た子どもと、安心してきない家庭で、不安なままに眠り、朝食もなく学校に来た子どもが、同じように学べるのでしょうか。

日本の子どもたちは、舗装されたトラックをランニングシューズで走れる子どもと、砂利道を裸足で走る子どもに分けられてしまっているのです。何より悲しいのは、砂利道

を、裸足の足に血をにじませながら走る彼らは、そのことを誰のせいにもしないことです。他の子どもと同じようにできないのは、自分の能力が低いからだ、子どもたちは考えます。その結果、自己肯定感を育むことができず、生きる力の源である意欲を侵食されてしまいます。

子どもの貧困とは、経済的な困窮だけを意味するのではなく、子どもが成長、発達する権利を保障されない状態を意味するのです。

他方、貧困が子どもたちにもたらすものとして虐待が考えられます。この関係性については、偏見に結び付くことのないよう十分注意をしなければなりません。東京都福祉保健局の発表によると、虐待相談を受けた家庭の多くで「経済的困難」や「孤立」「就労の不

安定」という状況が見られました。

経済的困難や孤立によって、大人はやり場のない、先の見えない不安を抱え、子どもと向き合う余裕を失い、家庭はストレスの圧力鍋のような状態になり、虐待の危険が高まるのではないでしょうか。虐待に至る親もまた、他者に助けを求められず、混乱と苦しみの中にあるのです。

ユニセフ・イノチエンティ研究所（07年2月公表）の「先進国における子どもの幸せ」という調査レポートの冒頭にこう書かれています。「国の状態を示す本物の目安とは、その国が子どもたちに対してどれほどの関心を払っているかである。子どもたちの健康、安全、物的保障、教育、社会との関わり、生まれてきた家族と社会の中で愛され、認められ、

その一員として含まれているという感覚を重視しているか」

日本は、高知県は、子どもたちにどれだけの関心を持っているでしょうか。日本の、高知の子どもたちは、どれだけ、「一員として含まれている」すなわち、社会に包まれて生きていると感じているでしょうか。

十分に眠れない、食べていない、安心できない子どもたちがたくさんいることに目を向けてください。コンビニの明かりの前で座っている子どもたちには、深夜に、硬いコンクリートの上以外に居場所がないことに気付いてください。

子どもの行動からは見えない、その行動を取らなければならなかった背景に目を凝らしてください。大人のその思いが、子どもたち

を貧困という北風から守る第一歩となるはずです。

2012年12月7、8日に、日本子ども虐待防止学会第18回学術集会高知りょうま大会を開催します。「『いのちの重さをみつめて』地域で支える親子の絆」をテーマに子ども虐待についてさまざまな専門家とともに考えます。ぜひ子ども虐待や貧困について一緒に考えてください。

〔参考資料Ⅱ〕「国民基礎調査平成22年」「児童虐待の実態Ⅱ平成17年12月（東京都福祉保健局）」「子どもの貧困白書（子どもの貧困白書編集委員会編・明石書店）」

〔出典Ⅱ〕「ユニセフ・イノチェンティ研究所 Report Card 7 研究報告書（翻訳・国立教育政策研究所・国際研究協力部10年3月）」



高齢者の人権

# ぼくの場合

(平成23年11月24日掲載)

## やなせ たかし

やなせ・たかし氏

漫画家、絵本作家、詩人、作詞家。1919年香美市生まれ。東京高等工芸学校図案科卒。三越宣伝部デザイナーからフリーとなる。72年「漫画家の絵本の会」結成。73年「キンダーおはなしえほん」(フレーベル館)にアンパンマン掲載。同年「2003年「詩とメルヘン」(サンリオ)編集長。88年「それいけ!アンパンマン」(日本テレビ系)放送開始。故郷にやなせたかし記念館アンパンマンミュージアム、詩とメルヘン絵本館開館。「手のひらを太陽に」作詞。勲四等瑞宝章受章。高知県名誉県民第1号。日本漫画家協会理事長。日本青少年文化センター理事。

ぼくは92歳ですから、れつきとした後期高齢者ですね。このあたりまでくると個人差が大きくなり、やたらに元気な老人もいてマラソンやったり、ヒマラヤ登山したりするひともあるし、車イス生活というひともしれば、天命が終るひとでもいて、バラバラです。

ほとんど参考になりません。自分は自分の道をいくしかない。

それではぼくの場合はどうかといえば、80歳過ぎる頃から病気の連続でね、病院と自宅とどっちに長くいるのかわからない。

病院ではすっかり顔なじみになり「またいらつしゃい」なんて言われる。なさけない。

それでもなんとか生きてはいるし、幸いに経済的には安定しているから、「ま、いいか」と思っていますけどね。

学校の同級生は全部遠いところへ旅だつてしまい、残っているのはぼくをふくめて2人です。肉親とも死別して天涯孤独ですが、仕事だけは今でもある。

ところが、ついに眼と耳が悪くなり、ついでに心臓もあぶなくなつて、ペースメーカー入れているから、電池で動いている人形みたいなもので心細い。

これがぼくの人生の晩年で余命いくばくだから、日野原重明氏のような大元氣老人とは全くちがいます。

高齢者といつてもひとそれぞれみんなちがうので、ひとまとめにして高齢者に対するメッセージとかは無理ですね。

ぼくの場合でいえば、やたらにいろんな病気をしたので、病気にくわしくなり、いくら

か忠告はできる。

しかし思い悩んだところでしかたがない。

とりあえず今日1日なんとか生きのびて、明日はまた明日、いのちがあればもっつけの幸いまた1日なるべく楽しく生きる。

そんなことでごまかしながら、人生の終末期をのりきっていくしかありませんね。

そのうちに科学が進歩して助かるかもしれないが、今のところ細胞を元気づけるのは笑うか恋するしかないですね。

冗談言つてなるべく笑えがいい。笑う門には福きたると昔のひとはうまいこと言つてますね、そのとおりです。

恋の方はベッドプレイはもう無理。中学生みたいなブラトニックラブでいい。

秘めたる恋で、これはなかなかいい。詩人

ゲーテは老いても恋してましたからね。

精神だけはミズミズしくしておくことは可能です。ぼくもひとには言いませんが、しよつちゅう惚<sup>ほ</sup>れてますね。具体的には何もしないので、人畜無害、細胞だけがよろこんでおさなくときめいてアンチエイジング運動をはじめめるのはいい気分のもですよ。

いのちみじかし、恋せよ爺<sup>じい</sup>さん、胸の血潮の冷えぬまにです。

世の中には老人むけ雑誌とかいろいろありますが、老人はすべて老人のものが好きかというとなんかそうじゃない。

65歳で交通事故にあい、老婆<sup>ろうば</sup>と報道されて「私はまだ老婆じゃない」と怒ってるひとがいましたからね。子供が子供あつかいされるのをいやがるのと同じです。

ごく普通でいい。ただ弱いひとと強いひとはいるから、弱いひとは助けなくてははいけない。これは年齢と無関係。

だから高齢者対策といったって何も特別なことじゃない。ひとそれぞれ。人間は人間らしくふるまえばいい。

だから、後期高齢者で、人生賞味期限切れのぼくも別に特別あつかいは望んでいません。この頃足もとも心もとないので、ころんだら助けてください。

そのていどで、べつにシルバースーツに座らなくてもかまいませんね。

たっている方が足の運動になりますから、ふだんはほったらかしておいてくだされ。

義務教育と人権

# 教科書無償50年

(平成23年12月24日掲載)

村越良子

むらこし・りょうこ氏

高知市長浜生まれ。元「長浜地区小学校教科書をタダにする会」事務局。元部落解放同盟高知市協議会常任書記。著書は「教科書無償―高知・長浜のたたかい」(共著、解放出版社)がある。

現在、義務教育の教科書はタダです。けれども50年前までは、保護者がお金を出して買うのが当たり前でした。教科書無償はどのようにして実現したのでしょうか。

1961（昭和36）年春、憲法第26条の「義務教育はこれが無償とする」を掲げ、無償配付を要求する運動が高知市長浜で起こりました。「なんぼ署名を集めて請願しても効果がない。今年から教科書を買うことはやめよう」と部落解放同盟長浜支部の役員が声を上げたのです。

当時、部落に多かった失業対策事業の賃金が一月当たり約6千円で、教科書代は小学校約600円、中学校約千円。ほかにPTA会費や学級費など、年間子ども一人当たり小学校で約4千円、中学校で約3千円。それらは本来

公費で賄うべき図書や教材・備品の購入、教師の視察研修、プール建設や運動場整備などに使われ、学校間に大きな格差を生んでいました。そのため、教育の機会均等と義務教育費全額国庫負担を求める陳情や請願運動が行われていたのです。

教科書不買の提案は、校区の教育研究集会で父母、教師、多くの団体に支持され、3月7日「長浜地区小中学校教科書をタダにする会」が結成されました。ビラ配り、地区集会、対市交渉など3カ月に及ぶ激しい運動が続き、不買の署名は児童生徒2千人のうち1600人分が集まりました。

長浜小学校の講堂をうずめた教育委員会交渉（3月25日）写真Ⅱでは「無償の原則は認めるが、買う能力のある人には買ってもらい

たい。どうしても買えない人には枠を広げて支給します」と繰り返し返す市教委に、「憲法を守って教科書は買いません」と宣言しました。そして8割が買わず、支給を求めたため、市教委は「国の財政的裏付けなくして一地教委の努力や権限では不可能」と総辞職し、市長も交渉を拒否します。



これを機に、運動に反対の人々が会を作り、差別的分断、妨害を始めました。動揺する親たちに教科書を買わせ、同和教育に熱心な教師を呼びつけて詰問し、連日学校に押しかけ、圧力をかけます。プリント教材で授業をしていた長浜小、南海中の努力も限界でした。何よりも子どもたちに対立や混乱を生じさせてはなりません。「無償の義務なし」とする市教委への文部省の回答、「無償は授業料免除を指す」という学者の説、また長びく不買に世間の非難も高まる中、「タダにする会」はついに涙をのまざるをえませんでした。それでも高知市全体でこれまでの3倍、長浜へは5倍の教科書代を市教委は計上したのです。

こうして5月15日、「タダにする会」は最後の集会を開き、「われわれは権利として受

け取る。そしてこれからも義務教育無償を實現させるために運動を続けていく」と宣言しました。

62年度は小規模な運動になりましたが、無償教科書数は前年度の4倍を獲得することができました。折しも国会では池田勇人首相が「憲法の理想に向かってまい進する」と「教科書無償法案」を提出。翌年に「無償措置法」も成立し、教科書無償制度は確立しました。

これは、各地の声とともに長浜の強い要求運動ががちとつた歴史的成果であり、守っていくべきかけがえのない財産でもあります。時代を後戻りさせないために、いま一度この運動の意義を振り返ってみることが必要ではないでしょうか。



平成23年度

## 人権啓発シリーズ集

平成24年3月

発行 (財)高知県人権啓発センター  
〒780-0870  
高知県高知市本町4丁目1-37  
TEL 088 (821) 4681  
FAX 088 (821) 4440

印刷 川北印刷株式会社

写真は高知新聞社提供